

報告

養成校在学生の言語聴覚士イメージの変化

中野 良哉¹⁾, 野々 篤志²⁾, 塩見 将志²⁾

Change in image and expectations of speech therapy preparation course students

Yoshiya Nakano¹⁾, Atsushi Nono²⁾, Masashi Shiomi²⁾

要 旨

本研究では、学生の言語聴覚士（Speech Therapist，以下 ST）イメージの学年による変化，および，実習の満足度やバイザーから受けた指導内容と ST イメージとの関連について調査を行った。

ST イメージの「親しみやすさ」「力本性」「社会的望ましさ」の評価が，新入生および 4 年生では，他の学年より有意に高いことが示された。また，実習を経験した 4 年生の ST イメージは，実習施設の満足度，モデル・目標の存在，実力の発揮や，バイザーの指導の明確さ，一貫性，手ががりの提示，レポート指導の丁寧さとの相関が認められた。

これらのことから，実習を通じた学生の経験の質によって ST イメージはポジティブに変わりうることが示され，職業イメージの形成に実習指導のあり方が重要な役割を持つことが明らかとなった。

キーワード：言語聴覚士イメージ，継年的変化，臨床実習

【はじめに】

医療系の学校に入学する学生は，他の領域の学生に比べ比較的自分が将来進む進路に対して目的意識がはっきりしていると考えられる。また，医療職には多くの知識や技術を駆使する力が求められると同時に，専門職としての適切な態度が求められる。その一方で，社会環境の変化により，学生が明確な目的意識を持って医療関係の学校に進学することが難しいという現状がある。そうしたなかで，医療職を目指す学生は，専門職種に対しどのようなイメージを抱いて入学し，それがどのように変化していくのであろうか。

学生にとって，これからなりたいと考えている職種に対するイメージが好ましいほど，職業意識や適

応感に好影響を与えるという報告がある。例えば，関，明田¹⁾は，看護学生を対象に，看護師イメージを測定し，志望動機，職業選択，卒業後の就職希望先と看護師イメージとの間に関連を見いだしている。また，細見ら²⁾は，看護師イメージがポジティブな学生ほど，現在の学習や生活への高い適応感をもっていることを報告している。これらのことから，学生の職業的アイデンティティの確立に向けてのサポートを行う前提として，職種に対するイメージに着目することは有効であると考えられる。

上に述べたように，医療職を目指す学生の中でも看護学生を対象とした先行研究は数多く見受けられるが，言語聴覚士（以下，ST）の養成課程に在籍する学生を対象とした研究は少ない。ST 養成教育上

1) 高知リハビリテーション学院 理学療法学科
Department of Physical Therapy, Kochi Rehabilitation Institute

2) 高知リハビリテーション学院 言語療法学科
Department of Speech, Language and Hearing and Pathology, Kochi Rehabilitation Institute

の問題点を見いだす上でも、学生のSTイメージが、学年とともに、どのように形成されていくのか、また、それに影響を及ぼす要因を明らかにする必要がある。

看護学生の看護イメージについて調査した鶴田³⁾は、看護短大生1～3年生の看護師イメージを横断的に調査し、1年生の方が3年生よりもポジティブなイメージを抱いていることを報告しており、江口⁴⁾、真鍋ら⁵⁾の研究でも同様の結果が得られている。また、板垣⁶⁾は実習後のイメージはポジティブに変化することを報告しており、職業イメージに及ぼす実習経験の重要性を指摘している。しかし、こうした結果は看護職養成課程の学生を対象としたものであり、それとは異なる医療職であるST養成課程の学生にも同様の傾向がみられるのかについては明らかにされていない。

そこで、本研究では、ST養成課程に在籍する1～4年生を対象に、学年が上がることによりSTイメージがどのように変化するのか、4年生の実習の満足度や受けた指導内容がSTイメージの形成とどのように関連しているのか、の2点を明らかにし、今後の教育への示唆を得ることを目的とする。

【方法】

1. 被調査者：A県内の4年制私立専門学校ST養成課程に在籍する1年次から4年次までの学生135名(男性34名、女性101名)であった。学年ごとの内訳は1年次生28名(男性12名、女性16名)、2年次生36名(男性7名、女性29名)、3年次生32名(男性7名、女性25名)、4年次生39名(男性8名、女性31名)であった。

2. 調査実施時期：2006年2月(予備調査)、7～8月(本調査)

3. 調査用紙の構成

1) 予備調査質問紙：短期実習を終了した学生を対象に、実習での経験やバイザーから受けた指導内容についての自由記述を求めた。

2) STイメージ評価尺度：対人認知における基本的次元を測定する林⁷⁾の特性形容詞尺度のうち20項

目を用い、SD法による7段階で評価させた。

3) 実習の満足度に関する評価：予備調査をもとに作成した実習の満足度に関連した項目を評価する5項目(実習施設の満足度、モデル・目標の存在、実力の発揮など)について5段階で評価を求めた。

4) 実習で受けた指導内容に関する評価：実習経験についての予備調査をもとに作成した7項目(指導の明確さ、一貫性、手がかりの提示、レポート指導の丁寧さなど)についてそれぞれ5段階で評価を求めた。

4. 調査手続き：2006年2月の予備調査では、短期実習終了後の学生に対して、実習での経験についての自由記述を実施した(本調査の4年生が3年次に記入)。本調査では1～4年生に対し、2006年7～8月にSTイメージ評価尺度を実施した。また、4年次生については長期実習終了後の時期にあたり、実習での経験についての評価もあわせて実施した。

5. 倫理的配慮：調査用紙は全員に配布し、他の調査の結果との比較のために記名式としたが、調査への参加は自由とし、実習や授業の成績には関係しないことを伝え、研究の主旨に同意を得た上で記入を求めた。

6. データの集計・分析方法：イメージについては主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。学年によるイメージの違いについては1要因4水準の分散分析を行った。4年次生の実習での経験とSTイメージの相関についてはスピアマンの順位相関係数を用いた。なお、本研究の統計学的有意水準は全て5%未満とした。

【結果】

1. STイメージの因子構造と因子得点

STイメージ評価項目について因子分析を行った。その際、因子数はこの尺度を用いた過去の研究結果(林ら⁸⁾、廣岡ら⁹⁾)から判断し3因子とした。それぞれ「親しみやすさ」「社会的望ましさ」「力本性」と解釈された。林⁷⁾によれば、「親しみやすさ」は好感・親和などの社会・対人評価、「社会的望ましさ」は尊敬・信頼などの知的・課題関連の評価、「力本性」は意志の強さ、活動性の次元である(表1)。

表1 STイメージの因子分析結果

	成分		
	1	2	3
【第1因子 親しみやすさ】			
明るい - 暗い	0.82	0.17	-0.15
親しみやすい - 親しみにくい	0.77	0.14	0.11
ユーモアのある - ユーモアのない	0.72	0.19	
親切的な - いじわるな	0.61	0.20	0.49
さっぱりした - しつこい	0.59	-0.15	0.31
感じのよい - 感じの悪い	0.55	0.37	0.45
信頼できる - 信頼できない	0.54	0.48	0.40
心のひろい - 心のせまい	0.51	0.33	0.27
【第2因子 力本性】			
積極的な - 消極的な	0.35	0.72	
まじめな - ふまじめな	-0.15	0.71	0.21
意志が強い - 意志が弱い	0.14	0.69	
意欲的な - 無気力な	0.24	0.66	
責任感の強い - 無責任な	0.15	0.55	0.26
がまん強い - あきっぽい		0.55	0.46
自信のある - 自信のない	0.31	0.40	
【第3因子 社会的望ましさ】			
ひかえめな - でしゃばりな	-0.15	-0.13	0.73
落ち着いた - せっかちな		0.18	0.71
すなおな - いじっぱりな	0.40	0.11	0.66
誠実な - 不誠実な	0.27	0.50	0.58
知的な - 知的でない	0.11	0.20	0.37
寄与率 (%)	19.76	18.35	15.38
累積寄与率 (%)	19.76	38.11	53.49

2. STイメージの学年による変化

「親しみやすさ」は、2、3年生よりも1年生が1%水準で、4年生が5%水準で有意に評定が高いという結果が得られた。「力本性」は3年生よりも1年生が1%水準で有意に評定が高いという結果が得られた。「社会的望ましさ」は3年生よりも1年生が1%水準で、4年生が5%水準で有意に評定が高いという結果が得られた(図1, 表2)。

表2 STイメージ評定の平均値と学年差

	学年	平均値	標準偏差	標準誤差	多重比較(Bonferroni)
親しみやすさ	4	43.08	7.48	1.21	3-4年* 2-4年* 1-2年** 1-3年**
	3	38.35	6.78	1.24	
	2	38.53	9.36	1.58	
	1	45.14	6.39	1.23	
力本性	4	41.38	4.29	0.70	1-3年**
	3	39.32	5.47	1.00	
	2	40.83	5.66	0.96	
	1	43.36	3.46	0.67	
社会的望ましさ	4	26.33	5.01	0.81	1-3年** 3-4年*
	3	23.43	2.97	0.55	
	2	24.56	5.34	0.90	
	1	27.04	3.59	0.69	

*p < 0.05 **p < 0.01

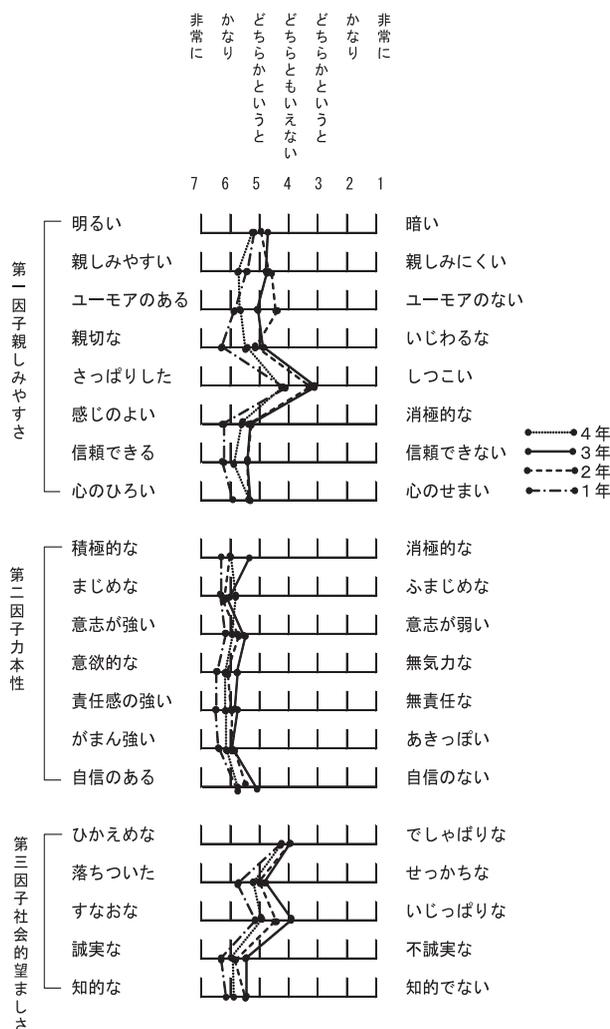


図1 STイメージの変化

3. 4年生のSTイメージと実習での経験に関する評定

実習の満足度に関する項目では、「実習施設に対する満足度」は、「親しみやすさ」、「力本性」と正の相関を示し、「もっと臨床実習をしたいと感じ

た」は「力本性」と、「自分の力を発揮できた」は「社会的望ましさ」と、「モデルとなるような人がいた」は「親しみやすさ」と、「STになりたいという思いが強くなった」は「親しみやすさ」、「社会的望ましさ」との間にそれぞれ有意な正の相関が認められた(表3)。

次に、実習で受けた指導内容に関する項目では、「学生に対する指示の明確さ」「事前事後指導」は「親しみやすさ」

と、「うまくいかなかったときの手がかりの提示」は、「社会的望ましさ」と、有意な正の相関が認められ、「実習の見通しについてのアドバイス」は、「親しみやすさ」、「力本性」、「社会的望ましさ」いずれとも有意な正の相関が認められた。「指導の一貫性」「レポートや報告書の指導」と、「親しみやすさ」、「社会的望ましさ」との間に有意な正の相関が認められた(表4)。

【考察】

本研究では、特性形容詞尺度を用いた質問紙調査を実施し、1～4年次生の言語聴覚士イメージを測定するとともに、4年次生の実習での経験を評定する項目と言語聴覚士イメージの相関について検討を行った。その結果、4年制の言語聴覚士養成専門学校に在籍

する学生の言語聴覚士イメージは「さっぱりしたーしつこい」「ひかえめなーでしゃばりな」「すなおなーいじっぱりな」を除くすべての項目で評定が7段階のうち4.1以上であり、全体的に好イメージ寄りであることが明らかとなった。看護大学生を対象に看護イメージを測定した工藤¹⁰⁾は、7段階で「自由な」以外すべての項目で4.0以上であり、全体的に好イメージ寄りであることを報告しており、看護とSTでは領域は異なるが、今回のST養成校在生を対象としたSTイメージの調査では、それとほぼ一致した結果が得られた。

次に、1～4年生の言語聴覚士イメージを横断的に分析した結果、新入生の言語聴覚士イメージの評

表3 STイメージと実習満足度に関する項目との相関

		親しみやすさ	力本性	社会的望ましさ
実習施設に対する満足度	I期	0.34*	0.43**	0.22
	II期	0.23	0.13	0.22
もっと臨床実習をしたいと感じた。	I期	0.32	0.33*	0.21
	II期	0.17	-0.05	0.11
実習中、自分の力を十分に発揮できた。	I期	0.14	0.07	0.10
	II期	0.30	0.14	0.34*
自分のモデル(目標)になるような人がいた。	I期	0.35*	0.25	0.14
	II期	0.25	-0.06	-0.07
言語聴覚士になりたいという思いが強くなった。	I期	0.37*	0.09	0.35*
	II期	0.43**	0.14	0.14

*p < 0.05 **p < 0.01

表4 STイメージとバイザー評価との相関

		親しみやすさ	力本性	社会的望ましさ
1. 実習生に対する指示が明確であった。	I期	-0.20	0.01	0.02
	II期	0.38*	0.07	-0.02
2. うまくいかなかったときには、その原因を一緒に考えてくれた。	I期	0.24	0.19	0.34*
	II期	0.15	-0.25	-0.10
3. 注意するだけでなく、どうすればよいか考える手がかりを与えてくれた。	I期	0.23	0.27	0.41**
	II期	0.18	-0.07	-0.02
4. 実習の見通しについての手がかりを与えてくれた。	I期	0.34*	0.39*	0.50**
	II期	0.21	0.03	0.05
5. バイザーの指導には一貫性があった。	I期	0.04	0.11	0.10
	II期	0.35*	0.20	0.35*
6. レポートや報告書の内容について丁寧に指導してくれた。	I期	0.32*	0.22	0.49**
	II期	0.18	0.09	0.19
7. 個々の実習内容に取り組む前に事前指導をしてくれた。	I期	0.06	0.02	0.01
	II期	0.34*	0.13	0.03

*p < 0.05 **p < 0.01

定は他の学年と比較し有意に高く、ポジティブなイメージを持つという結果が得られた。その一方で2、3年生ではイメージが低下し、4年生はそれと比べて有意に評定が高く、ポジティブなイメージを持つことが分かった。これは、STとは異なる医療職である看護職者養成の領域での結果³⁻⁶⁾とほぼ一致するものであった。

イメージの改善がみられた実習経験後の4年生では、「実習施設に対する満足度」、「実習中、自分の力を十分に発揮できた」、「モデル(目標)になる人の存在があった」、「バイザーの指導に一貫性があった」、「バイザーによる実習の見通し、手がかりの提供があった」といった実習の満足度や受けた指導内

容に関する項目の評定とSTイメージとの相関が認められ、実習体験を通して、STに対する認識を深める過程で、職業イメージの形成に実習環境や臨床実習者の実習指導のあり方が重要な役割を持つことが明らかとなった。

その一方で、イメージの低下がみられた。2、3年生については、これまで理想としていたイメージが、専門職種として要求される水準の高さ、難しさに直面し、より現実的なイメージへと変化したために、低下したことが考えられる。その後、実習を経験することで、仕事の意義ややりがいを見いだしたために、再びポジティブなイメージに変化したことが考えられる。

以上のことをふまえると、学生の専門職者への認識の形成過程には、段階的な変化があるが、必ずしも順序を追ってポジティブなイメージの形成へと進むものではないと考えられる。2、3年次での職業イメージの形成過程において、入学時とは異なる職業意識の質的な変化や理想とするイメージと現実的イメージとの葛藤を経て現実的イメージが強まることによるイメージの低下が考えられるため、職業アイデンティティの形成を含め、そうした質的变化を捉えた、より詳細な検討が必要となる。また、施設見学の導入や授業改善などを含め、学生の職業イメージに対する、理想と現実の葛藤を解消できるような学習環境づくりが必要となるだろう。

本研究では横断的な調査方法を用いたが、STイメージが縦断的にどのように変化していくかを調べるとともに、理想のSTイメージから現実のSTイメージへの変化過程についても詳細に分析する必要がある。また、本研究では、調査対象が1校の学生のみで、対象者数が少なかったこともあり、既存の形容詞対を用いて既存の次元に従って結果の集計を行った。そのため、STイメージに特有の因子を見いだすには至っていない。今後調査範囲を広げ、ST養成校の学生全般、および現職者が有するSTに固有のイメージを検討することが課題である。

【文献】

- 1) 関 文恭, 明田恭子: 看護学科学生の看護婦に対するイメージの要因分析. 九州大学医療技術短期大学部紀要 14: 35-39, 1987.
- 2) 細見明代, 川越清子・他: 看護学生の看護婦イメージに関する研究 看護婦としての自己イメージと適応感. 神戸市看護大学短期大学部紀要 11: 27-39, 1992.
- 3) 鶴田来美, 工藤綾子・他: 短大生の学年による看護婦志向性と看護婦イメージに関する研究. 順天堂医療短期大学紀要 7: 72-82, 1996.
- 4) 江口 瞳, 寺澤孝文・他: 看護師イメージの因子構造と学年進行による看護師イメージ得点の変化. 日本看護研究学会雑誌 29(4): 71-80, 2006.
- 5) 真鍋淳子, 野尻雅美・他: 看護学生の看護婦イメージの研究 大学生と短大生の比較. 看護教育 35(6): 427-433, 1994.
- 6) 板垣恵子, 小林淳子・他: 「基礎看護Ⅰ」実習前後のイメージの変化 病院, 患者, 看護婦, 看護のイメージ分析を通して. 東北大学医療技術短期大学部紀要 1: 56-67, 1992.
- 7) 林 文俊: 対人認知構造の基本的次元についての一考案. 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学) 25: 233-247, 1978.
- 8) 林 文俊, 大橋正夫・他: 暗黙裡の性格観に関する研究-1-個別尺度法によるパーソナリティ認知次元の抽出. 実験社会心理学研究 23(1): 9-25, 1983.
- 9) 廣岡秀一, 山中一英: 対人認知次元の構造的変化に関する縦断的研究. 実験社会心理学研究 37(1): 37-49, 1997.
- 10) 工藤由紀子, 石井範子・他: 看護大学生の看護に対するイメージ 入学時における家族背景・入学動機と卒業後進路志望との関連から. 秋田大学医学部保健学科紀要 11(2): 119-126, 2003.

